

中学生の部

最優秀賞

八雲が生きた証

焼津市立東益津中学校 二年 藁科 希和

そこには、八雲が生きた証があった。

中学一年生の夏、私は友達と一緒に焼津小泉八雲記念館を初めて訪れた。中学の授業で「私達の住む焼津を調べよう」というテーマが与えられたからだ。それまで小泉八雲のことで知っていることとさえも、「耳なし芳一」などの怪談を書いた人ということと、焼津の海が気に入って何度か遊びに来ているということくらいだった。

八雲記念館に入ると、そこには「八雲が妻のセツにあてた手紙」や「焼津のことを書いた作品の原稿」また「八雲が好んで使っていた望遠鏡やキセル」などが展示してあった。それは、まるで八雲がついさつきまで、この焼津にいて原稿を書き、休みの日には、この望遠鏡を持って散歩に出かけたような、そんな気持ちにさせられた。ただ、そこに八雲がないのが不思議な気さえした。八雲は、この望遠鏡で焼津のどんな景色を見たのだろうか。私が住んでいる所にある高草山も見たのだろうか。またこのキセルを吸いながら、何を思っていたのだろうか。この八雲記念館は、八雲がいた遠い昔と現在を結びつけるとても不思議な空間だと思った。

この八雲記念館の展示物やパンフレットなどで、私が知らなかった八雲のことが少しずつわかってき

た。それから私は、八雲のことがもつと知りたくなり、焼津のことを書いた「焼津にて」、「乙吉だるま」また「雪女」「むじな」などを讀んだ。

「乙吉だるま」を讀んで真つ先に思ったのは、我が家にある「だるま」のことだ。そのだるまはとも大きく、真つ赤な顔をして、りっぱなひげを生やしている。和室の神棚に座り、ぎよろりと大きな目玉で私達家族を見ている。にらまれていよう、小さい時その和室に入るのがとても怖かった。また兄の部屋には小さなだるまがある。去年父が祭りで兄の為に買ってきただるまだ。そのだるまは兄が高校に合格した時、二つの目玉になった。その時兄に教えてもらったのだが、だるまは買った時に願いを込めてだるまの左目を入れ、その願いがかなった時右目を入れるのだそうだ。

だるまは売られている時はただのだるまだが、一つ目が入った時だるまは命が吹き込まれ、その人、または家の神様になるらしい。そんな小さな神様を信じる日本人々は素朴な心の持ち主で正直者である。八雲は言っている。その小さな神様の片目が無いことに驚き、乙吉に声をかけた八雲もまた、素朴な心をもっていたに違いない。

また八雲は新しい西洋の文化より、日本の古いしきたりや風習をとても好んでいたようだ。我が家では、家族の誕生日の朝には必ず祖母が赤飯を炊いてくれる。お彼岸の時は、ぼたもちを作り、祭りの日にはちようちんをつるし、寿司を食べるなど、昔からの風習をとても大事にしている。また私が住んでいる地域の秋祭りには、大人も子どもも大勢の人が参加し、はっぴを着てちようぼろを引く。地域の六年生の女子は、無事に育った米や作物を神に感謝し舞を踊る。昔から伝わっている地域の大切な行事だ。私も六年生の時参加したが、拝殿に入ったのは初めてで、とても緊張したのを覚えている。こうしてみると私達の生活は、昔からの古い風習に支えられ、また神様に見守られていることに気づく。八雲は、私達が普段何気なく過ごしてしまっている生活の中に日本のよさを見つけ、驚き、共感している。

そんな日本のよさを教えてくれた八雲は、ギリシャ生まれの外国人だった。ラフカディオ・ハーンから小泉八雲となり、日本の土へと帰っていった八雲は、日本人よりも日本が好きだったように思う。そして誰にも優しく、正直者の乙吉を「神様のような人」と言い、焼津の人々と焼津を愛してくれた八雲。

八雲が焼津を訪れた最後の年、帰京する際乙吉にこう言っている。

「焼津へ別荘を建てたいから、焼津ホテルの近くの敷地を求めてほしい。」

それから約一ヶ月後、八雲は帰らぬ人となってしまった。もし八雲がもつと長生きをしていたら、焼津に別荘を建て、大好きな海を眺めながら老後を過ごしたにちがいない。

今、八雲の姿は見えない。けれど、焼津の駅を降りると、まず「八雲の碑」がある。そして、残念ながら「八雲滞在の家」は明治村に移されてしまったが、八雲ゆかりの寺や神社、お地藏様、また「八雲記念館」などがあり、八雲が確かにこの焼津にいたことが感じられる。そして、八雲の書いた文章からは、八雲の心が伝わってくる。今、八雲の生きた証は、私達焼津の人々の心の中に、確かに伝わっている。そしてまた八雲の書いた文章と出会う全ての人達へと永遠に伝わっていくにちがいない。